

循環型社会を目指した大学の教育研究と環境保全システム

環境管理センター長

本 水 昌 二 (理学部)

毎年6月は環境月間とされ、環境に因んだ行事が全国的に行われている。今年の統一テーマは、「地球と未来の仲間のために暮らしを変える わたしから」である。センターは、教育研究活動に伴う有機・無機廃液の処理及び洗浄・生活排水の管理に加え、環境保全に関する教育研究も主要な任務であり、その一環として環境月間に公開講演会を開催した。“環境中の病原性微生物”について篠田先生(薬学部)にご講演いただいた。平日の午後にもかかわらず、腸管出血性大腸菌O-157への関心は高く、参加者は予定を大幅に越え(約130名の参加)、外部の方特に女性がかかり多いように見受けた。私語はなく熱心にメモする人が多数見受けられ、また鋭い質問も頂戴した。立場上、化学から見た地球環境について筆者も講演させていただいた。

環境月間がスタートして間無しの頃、筆者の関係するあるシンポジウムに参加した。そこでは、学術成果の社会への還元の一環として、付設ワークショップ“市民分析化学講座—あなたが測る身近な環境”，が開かれていた。講演と展示デモではあったが、参加者は予定数を大幅に越え大盛況であった。飲料水、排水等を持参し、熱心に議論している人を多数見かけた。参加者は年配の方が多く、期待した若者は少ない。

これら二つの行事から、環境問題に対する社会の関心の深さを改めて認識した。一昔前の公害問題は、地域的な問題ととらえられる面が多かったように思うが、最近の環境問題への関心は、自分自身の健康にも直接かかわり、またそれだけに子孫への影響等から、年配者の関心が高いように感じた。若者の環境問題への関心、より良い地球環境を築くための行動をいかに喚起するか、今後の課題の一つと感じた。

岡山大学構成員は、1万5千名を越えている。人数規模からは、一つの町村にも匹敵するもので、日常的に排出される廃棄物量は膨大である。また、廃棄物には教育研究活動に起因するものも多く、中には実験研究により作り出される正体不明あるいはその諸性質等未知な物質が多数存在するという特殊性がある。新しいモノづくりも教育研究現場における一つの大きなテーマであることを考えれば、やむをえない面がある。しかし、昨今は、ある国、ある団体、個人だけの都合で行動することは許されず、常に排出者責任が付随する。教育研究活動の産物といえど排出者責任が求められる。新物質、新材料などの発見は研究者を大いに満足させたが、これからは未来にわたってその及ぼす影響にも十分配慮することが求められる。教育研究における材料の選択、スケールダウン、リサイ

クルなど根本的な工夫・研究も必要となろう。

大学の主要任務に、次代を担う若者の育成があることを考えれば、教育研究を通して、学生に環境保全・省資源・リサイクルへの取り組みを学ばせ実行させることも重要な教育目的の一つであろう。自分で排出した廃棄物には責任を持つことが、より良い地球環境を未来に伝えるための第一歩である。まず教職員が一体となって率先・実行し、学生に範を示すことから始めたいものである。廃棄物の減量化と有用資源化物としての分別回収、リサイクルを推進することで21世紀に向けた循環型社会構築の先導を大学は目指したいものである。労力、時間、金がかかり大変なことではあるが、教育的意義、社会的意義は大きい。

現在大学内外で起こっているあるいは起こり得る環境問題研究に先導的に取り組み、かつ学内の諸問題に迅速・果敢に対処するために、関連学部・学科・施設等が一体となった“大学の環境マネジメント”を推進する新しいシステム構築が要望される。センターは、廃液、排水業務以外にもできるだけ協力し、大学の環境問題がスムーズに処理されるよう願っている。関係各位の一層のご支援とご協力を賜りたい。